

明確な「ゴール」を

重松 靖 Shigematsu Yasushi
(東京都国分寺市立第二中学校)

1 外国語・英語を学ぶ目的を伝える

グローバル化が進む今、国際共通語としての英語運用能力を身につけ、積極的に国際社会に貢献する人材の育成が急務とされています。「英語の授業は楽しかった」だけでは済まされないのです。

ではどうやって？

まず、外国語を学ぶ目的、外国語を学ぶとどんな世界が広がるか、どんな可能性があるのかを生徒に話してほしいと思います。ベネッセの調査によると、9割の中学生が「大人になったとき、英語を使う必要がある世の中になっている」と回答していますが、「自分自身は英語を使うことはほとんどない」と思っている生徒は4割に達します。また、英語を学ぶ目的のトップ3は「中学生は勉強しないといけないから」(78.8%)、「テストでいい点を取りたいから」(77.9%)、「できるだけ良い高校や大学に入りたいから」(71.3%)と、コミュニケーションとは無縁のものばかりです。

言語には次のような役割があります。

- ▶ 事実等を正確に理解し他者に的確に分かりやすく伝える
- ▶ 事実等を解釈し説明するとともに、互いの考えを伝え合うことで、自分の考えや集団の考えを発展させる
- ▶ 互いの存在についての理解を深め、尊重していく
- ▶ 感じたことを言葉にしたり、それらの言葉を交流したりする

(文部科学省, 2011)

外国語を学ぶことによって、こうしたことが地球

規模でできるようになるのです。私たち自身が「英語を学ぼう」と思った理由、「英語を学んで良かった!」と感じた経験などを自分の言葉で生徒に伝えることも大切だと思います。平成24年に文部科学省が配布したDVDのタイトルではありませんが、「Broaden Your Horizons with English!」「英語を使って世界へ羽ばたけ!」と熱く語りましょう。

2 中期的な目標を設定する

「いつまでこの登りは続くのだろう」。頂上が見えない状態での登山は、本当にきついものです。ところが、尾根に出て、目指すべきピークが見えた途端「よし、あそこまで行けばいいんだ!」と急に元気になるものです。

英語の学習にしても同じです。ただ「入試科目だから勉強しろ」と言われるよりも、「中学生だから勉強しなくちゃ」と考えるよりも、今学習していることを使って、「こんなことができるようになる」というゴールがはっきりすればやる気も出てきます。

そのためにも、中学卒業時に到達すべき具体的な目標を明らかにし、生徒と共有してください。文部科学省はCAN-DOリストの形で、学習到達目標を設定することを推奨しています。平成26年度の英語教育実施状況調査(中学校)によるとCAN-DOリストにより学習到達目標を設定している学校は31.3%で前年度から13.8ポイント上昇し、今後も増えていくことが予想されます。しかし、その内容は生徒にとって分かりやすいものになっているでしょうか? 生徒と共有しているのでしょうか?

平成26年3月、文部科学省は現行の中学校学習指導要領に基づいて作成した「能力記述文の形で示した国の学習到達目標(試案)」を作成しました。例

えば中学校の卒業時における「話すこと」の到達目標の1つは、「自分の考えや気持ち、事実などを、聞き手を意識しながら的確な英語で伝えることができる」となっています。

CAN-DO リストは、学習指導要領の外国語科の目標に基づいて学年ごとの学習到達目標を設定する、という前提なので、どうしても抽象度が高くなります。そのままでは、生徒が読んだときに明確なゴールとして認識し、「できた」と達成感を味わうことがなかなかできません。そこで、次のような学習到達目標を設けてはどうでしょうか。

日本を訪れた外国人に、「日本に来て良かった」と感じてもらえるような、あなたが考える東京の魅力を、その理由とともに紹介することができる

これだとゴールがはっきり示され、何をすればよいのか、どんなことが求められているのかが明確です。

こうした具体的、かつ学校や地域の特色を生かした学習到達目標は生徒の意欲を高め、達成感も味わえるはずです。さらに、こうした目標から逆算して学年・学期ごとの学習到達目標を設定します。例えば「話すこと」であれば、次のように設定できます。

- 1年1学期：自分らしさが相手に伝わる自己紹介をすることができる
- 1年2学期：友だちにインタビューした内容をもとに、その人らしさが伝わるような「友だち紹介」をすることができる
- 1年終了時：自分が大切にしているものや場所、友だちや家族について、これまでの思い出を含めて話すことができる

こうしたパフォーマンスができるよう、必要な知識・スキルを単元の指導計画や、1時間ごとの指導計画・帯活動の中に落とし込み、繰り返し指導します。なお、上記の「話す」活動は事前に準備することが可能な発表(Spoken Production)です。生徒が苦手としているのは、聞いたり読んだりしたことについて、他の人と話し合い、自分の意見や考えを述べたりする即興的なやりとり(Spoken Interaction)です。こうした力も意図的・計画的に指導したり、授業の中で教師が生徒と英語でやりとりしたりする

場面をできるだけ多くつくるのが大切です。

3 監督・コーチ・トレーナーとしての教師

2020年には小学校英語が教科化されます。中学校はもはやスタート地点ではありません。マラソンで言うならば5kmの通過点かもしれません。トップを快走してきた生徒、第2・第3集団にいる生徒、集団から遅れそうな生徒等さまざまです。そうした生徒達に次のポイント(学習到達目標)を同時に通過させようというのはいささか酷なことです。トップ集団の生徒達には、走り方をしっかり指導したり(正確さ)、目標タイムや負荷のかかるコースを設定する(内容・質、量)が必要でしょう。集団から遅れそうな生徒には、完走することを目標に、必要最低限のフォームと平坦で最短距離となるコースを示し、励まし・勇気づけるとする必要があります。教師は監督・コーチ・トレーナーであり、沿道で声援をおくるファンであるべきです。生徒が達成感をもって中学校という区間を完走できるように。

4 おわりに

20代の頃、私は部活動やクラス経営に燃えていました。「いい英語の教師より、いい学級担任でありたい」と公言してはばからず、英語の授業は教科書通りに指導するだけ。ただ、「英語嫌いは作らない!」という思いは強く、卒業時「英語はよくわからなかったけど、授業は面白かったよ」という生徒の言葉が何よりのご褒美でした。でも、聴衆を話芸で引き込む落語家とはほど遠い、その場限りの一発芸、ただ「面白おかしい」だけの授業でした。それから約30年、多くの壁にぶつかりながら、さまざまな試行錯誤を重ねてきました。

善かれ悪しかれ、これまでの経験から学んだことをこれからの英語教育を担う先生方にお伝えし、何かしら参考になることがあればこんなに嬉しいことはありません。数回にわたって、「基礎講座」を担当させていただきます。よろしく願いいたします。

【参考文献】
ベネッセ教育総合研究所(2014)。「中高生の英語学習に関する実態調査」。
ベネッセ教育総合研究所(2009)。「中学校英語に関する基本調査」。
文部科学省(2011)。「言語活動の充実に関する指導事例集【中学校版】」。